



無言抄

伊地知文庫
文庫20
216
3



伊地知氏書冊
女言抄卷之下

三 四季詞

四季たり花郭云月雷ふ乃あはれ移くを打き
志はつた不入地家勢をまも一しつゆきしり
くとりまはしつハ物くるるととく記お記也ハ
上巻坪のく河乃うらりとあふしほく又分ま
きとふらり

春 けねハ皇居神祇と備で以時節の
以方り物

早ととるらり といふ事四季あや天子は天
地等とあり終るゆき也元正

寅乃時也清涼殿を庭少て乃る也
あまのついで
天子思く
屠穀白敷 志はれ元正
天子は依り



あつるなりとそまじりまじりよめり一家飽之一里
りや病き

金とり子 某を性しててみるサ女なり

氷様 日え日るりこりれい存高年凶

腹赤贅 え日るりもれい

九外胆後國守古郡長濱よりてみるまじり
魚より景約天皇乃のり節云子を供
るハ聖武天皇乃の所守まじり

あし まじり

白馬節一云 正月七日小天子乃あをる

あし まじり

あし まじり

破掌摘 まじり

あし まじり

子日 小松川もまじり

卯杖 あし三寸なり正月卯日やそ可杖

懸石 正月十一日外官陰自なり外友とて
法國乃のり

あし 正月十日り日六日小もまじり

りさし乃綿 此衣取端弁乃時のようあり

御新おみ 正月十五日百官志勤とすくはる

賭弓つり 正月十八日射子乃所とさきくあり

松乃祀 初春よりありゆきあり

松の緑のり 日王りことりきやきく松志

松の 花をひきいてのきく松の報あり

柳の 雪紙ひきいてのきく

氷乃いし ことかきりぬきりくらのきく

雪月取り雪 雪より雪乃名取雪乃中か

物りちりあわゆる道果人よりきく

水乃心 清みぬききききき

あいのり ことかきりぬきりくらのきく

尚代 水造りあき

依保姫 神祇りあり

霞乃洞 院乃四音乃 春乃文 春乃文

初年祭 二月三日 春日祭 二月と申日

ありあ度の祭ハ初と申とよかゆりよきあり

乞う

向あ

儀紀条

乞うまはる
親乃嘆は疫葬か
教して人をさや

乞う申すりくぬをいひてはるんを乞うまはる
乞うまはるをいひてはるなりまはるをいひてはるなり
乞うまはるをいひてはるなりまはるをいひてはるなり

心乃紀

春より用ひたり

心乃紀

も心紀をいひてはるなり
心乃紀

まぬり乃紀

もまぬり乃紀
橋たいてい

まぬり乃紀
まぬり乃紀

橋具

向あをいひてはるなり
橋具

橋回

まぬり乃紀
橋回

遅橋

まぬり乃紀
遅橋

をそ記日

まぬり乃紀
をそ記日

何くらなる

まぬり乃紀
何くらなる

まぬり乃紀
をそ記日

霞

まぬり乃紀
霞

まぬり乃紀
をそ記日

他

まぬり乃紀
他

まぬり乃紀
をそ記日

まぬり乃紀
をそ記日

日より一戸送り 四月中より申す日あり

賀茂糸 針山より送りぬすや 四月中酉

賀茂乃見あ種 日ありのすりあり

あふい 葵と桂とをあふいといふありあり

より下賀茂のに種とハ別雷種あり

種取 よりありあり

靴 よりありあり

梅 よりありあり

よりありあり

靴云 よりありあり

けとあつ鶴 鶴馬のけとよりこれあり

鳥屋鷹 水鳥乃巢

水鶏 水かや 鴨川 乃れより鴨組あり

糸河 よりありあり 黙将 よりありあり

移しひり 照射 よりありあり

麻子 よりありあり

鮎 よりありあり

和布の心ハ夏ままりハ西にしのこ心こ 日あり夏まかり

つりハ船ふね 藻も乃の心こ ハ草くさのこ心こ ハままりハ

うハ心こ乃の心こ 日あり草乃心

海松うみまつ ままりハままりハ

田い乃の心こ 玉たま乃の心こ じこ乃の心こ

らハ乃の心こ 拖ひままりハままりハ

乃ハ竹たけ 夏なつやたけ乃の心こ 梅うめ乃の心こ 梅うめ乃の心こ

夕ゆふ立た 夕ゆふ乃の心こ 電でん乃の心こ

汗あせ あせ乃心

虫むし乃の心こ あせ乃心

さハ乃の心こ

醴れい酒しゆ 六月乃心

祇園ぎえん乃の心こ 六月七日也祇乃代之八坂乃心

涼すず乃の心こ 涼乃心

清せい水すい 清乃心

清乃心

泉殿 たけのこ 月乃涼 いづ 秋 あき

秋の管 とく 秋乃涼 いづ 秋 あき

明乃涼 あき 秋乃涼 いづ 秋 あき

秋乃涼 あき 秋乃涼 いづ 秋 あき

秋乃涼 あき 秋乃涼 いづ 秋 あき

秋乃涼 あき 秋乃涼 いづ 秋 あき

秋乃涼 あき 秋乃涼 いづ 秋 あき

秋

一葉 ひとこほ 一葉 ひとこほ 一葉 ひとこほ

柳 やなぎ 柳 やなぎ 柳 やなぎ

初 はつ 初 はつ 初 はつ

初 はつ 初 はつ 初 はつ

早 はや 早 はや 早 はや

乃 の 乃 の 乃 の

紅葉 もみぢ 紅葉 もみぢ 紅葉 もみぢ

天の川 あまのがは の の の

嬌（さうり）とひり

天川

毎多とひりしてハ枯也只天河ハ名也
艸也何列子ありき遊遊とてハ女も早

乞巧奠

早と月つづもや庭り下らとたて
たわわりありあそりてり乃けとふ

祿（ろく）のいせ

とんあよの竹もあそりけ
てりよも同もるや

姪去衣

七夕乃具り又年乃とりきと云
りも七夕乃のりり

盃（う）蘭（らん）盆（ぼん）

玉（たま）のつる
馬屋出乃（うまやでの）鷺（ろ）

とひりても枯るり

初鳥（はつとり）鴉（あ）

こけりまの類小鴉
系枯るり

鷓（せ）

とひり白り初とひり字入と枯也小鴉と
云初あり成中し初たりありとひりも勿

海（うみ）長（なが）らり

小鳥（ことり）とつる

枯るり小鳥とつるも枯るり
とひり税あり

色鳥（いろどり）

あつりやしとひり
鴉乃（あ）字（じ）董（どう）

鶉（し）衣（い）

そととひり衣のそと也也生類とひり
季衣ありゆとよとひり二の嬌也

色（いろ）と

秋あり類とひり税ありと云た
り乃受所税ありぬ

みさ山（みやま）糸（いと）

七月廿七日山ありもけ
時ありありや所くるをさへ

相撲（まう）

七月廿七日合同廿八日也振出印く
たのち年中約事よあそり酒あり

小野糸 八月廿五日 龍田作

萩戸 甲く萩殿と記を柱らわらるるこゝろな
りあのかつとて及くすなり

芭蕉 萱同らるるや 節記をとり列す
種とりよと秋ありととり

菅首蘭 草一不不捨計
とらわと秋ありとわたり秋末

も 秋ありと秋末
秋ありと秋末

水汁草 あり秋末
あり秋末

宇治乃花園 生取 日八幡の
より

紫乃花 色くしつと記の紙やしつと記の
色くしつと記の紙やしつと記の

望月駒 八月十六日乃より
信濃乃勅使乃駒牽し後或細糸

三乃駒 あり

甲斐駒牽 八月廿七日

長花駒牽 八月廿六日

上野駒牽 八月廿六日

月乃とや字記 八月廿六日
八月廿六日

月乃部

みやぶ乃みなり

月の桂乃乾

乃桂のむとての乾や

月日

とつれより細乾なり此月乃月日なり
乃日なりと乾なりあつては乃月日なり

あつて月乃なり

星月乾

乃乃字あり

星乃光

あつて乾なり

中流くいはしひの思

なつては乾や
月日なりぬと

いふ乾乃坊馬

たのじ乃鷹

田よ七る
鷹なり

かりぬさしき

とては乾なり

鷹

う千鳥とじといては乾なり

疎乃鷹

乾なり細鷹乃疎乃心なり一向不謂

鴨

いもまの音なりぬとては乾や

鴛鴨ホ

り深しとては乾なり

楸

乾なりらると

櫃

ささも向か地取く

推

乾やいはらとては乾なり

推甘

も乾

楓

あつては乾や

点乃

勿備乾なり也別は乃乾なり

梨

實ハ秋也

柏

木のりきくらのこよも秋也
柏とつりの難あり

柞

秋よりそ山とつて秋ありあつと云
鏡ありし秋より成秋

短乃文

さしあの

行

くさ

八月十一日京
官乃陸員

華はさ坊孫

那宮乃御扱

い

く

くさり

鳩少

麻の狩人のまや一鏡り秋少風
とりま

さい

か

養

じ

ぼ

さしあの
地

御燈

九月三日より孝ありか
とあり天子乃水衣と祭あり

重陽宴

華苑酒まのり
秋乃儀あり

秋華

秋や九月十日より秋菊乃心あり

伴瓊奉幣

九月十一日より伴瓊乃儀の
儀乃あり

思草

言秋乃

月草

草草と月

柞野

りり色と只字くれと秋也
とひをひてハ秋あり

聖山の色

又

霜

子あつ同と
三と秋也

愚草

枯まり

霜の心奈

あつてさる

小田の秋

あつてか編枯まり

稲妻

あつてさる

さうして

あつてさる

かたはる葉の色

あつてさる

賞り行端

あつてさる

胸の霧

あつてさる

あつてさる

かたはる心

あつてさる

あつてさる

あつてさる

あつてさる

あつてさる

あつてさる

あつてさる

あつてさる

あつてさる

あつてさる

衾

あつちをひきひいては秋や地帯乃かよ
てい冬とさしり

葎

らりた色ともあつても地やろくく白梅
草乃類なり

紅葉乃らり

い冬もわともあつちをひきひいては
秋やあけのちのしほり

川のお葉

あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり
あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり

とみら乃色れ朽ち

あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり
あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり

けあてま

あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり
あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり

うの紅葉

あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり
あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり

落葉乃色

あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり
あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり

ねらりの秋さしき松風

あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり
あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり

野中後もたへ徳の山

あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり
あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり

冬

十月更衣

あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり
あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり

初霜

あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり
あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり

洞乃志々積

あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり
あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり

弓場始

あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり
あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり

紅葉乃らりて

あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり
あつちをひきひいては秋やあけのちのしほり

もみらるる雪もみらるる

朽葉きこいふ割もきこい 木乃葉衣きこいふての枝やあつちや

木乃葉衣 枯平の柳きこいふて

木乃葉衣お葉乃らうも月まよとむじと

冬草乃の何何も冬や萩もどねおの枯

草まよあうれも冬よりもをひきいひきい

山まよいふてはこれ枯乃部よ入ゆり

丁月乃さゆれ冬やまのり枯なり

月小志くれ冬や 月乃霜冬より

霜乃さゆれ冬より

初雪見糸桓帝天皇延暦年中より

山霜乃さゆれ冬より

霰まよも同あ 冬雪冬

淡雪も同あ 波乃雪

今乃雪今冬 震震

霧のよれ冬より

為收

勿論そのなりうとくまりゆへに也よと
してはおのり致るなりとも同家の

氷さく

とて冬より氷のひりあり
まふくまふくもやあこよ入

新嘗會

十一月中の
卯日あり ことよけ御あり

豊明節會

十一月中の辰日やま日あり
卯日あり節會と云はれ多や

ことよけ

大嘗會と云はれ御禊あり
まやあけらるることより禁裏

小糸

賀茂修時の参り實平の御時あり
と云はれ

日蔭系

あつと日付けと云はれと云はれ
てかんこふと云はれ

小忌衣

冬に神山をいり神と日あ節の
まひ人のまうねや賀茂の糸又大嘗

去乃時用物あり

里神示

とひして冬より大裏乃外あり
と云はれ

神示

冬や柿うふの早きりくまわら
まのこまけりまきうふとまの外うま

求子

あはれん河をい
日あ

庭火

冬や雑多ありと云
はれ

網代

網代ありと云はれ
物はあり

氷奠

驚狩

乃類之類冬より

狩場乃雉

りる馬ホ又とひけいりら
苗のりつめぬとら馬と

へ草をけ外驚細驚の道具ことく電冬より
其乃那のきさうし又とやこめい夏や秋のきこり
ともよまり回季ともいひつりこめい

あら乃じし馬

千馬

考とじしい旁
とじしいて

結ちりきこい冬より

かしの火

考ふ

うけの火

同考

念

加端冬

結り

内侍江御神系

十二月 符お使 乃さびの報りくよより
十一月 十二月十二日

佛名

十二月十九日くり之日乃馬や佛と
考ふ考ふともあり

年又三

乃

乃

乃

考ふ年

長とと

考ふ考ふと考ふ考ふ

節

十二月晦日よりよあり乃命婦と
考ふ考ふ天子乃御けきと

儼久

乃日乃鬼ヤらいるやらよとと
考ふ考ふ乃夫とと乃邪鬼

年此内乃立春

考ふ考ふ乃考ふ考ふ

乃部

四 北季詞

北季と云ふは田舎の詞也
詞多しと云ふは能

徼 徼 徼 一と皆り七午五度ありなり報也

柳 報也柳と云ふは
氏村多しと云ふは

葉守神 涼き道 報多し

法乃今あり 心乃月 心乃月 心乃月

ころのあり 心乃月 心乃月 心乃月

月日 天乃今記指

水邊ありあり

いさひり 催馬来 報多し

羨懐山 石川 葦垣 葛木 真金吹 於麻川 奥山

浅緑 御馬草 竹河 け殿 行口 倉垣 彦山

後山 田中升戸 言嶋 婦門 大元 長澤

東屋 定井 総角 言初古 貫河 苑鳥升

浅み橋 大道 美柳 逢石 吾門 大井

鶏鳴 雄竹海 浅や 以上律多し是れは

嶽壺 報多し

定西より法度と云ふ守りなり

松乃三とり 報多し

きりぎりすもみぢりもきりぎりす

松乃葉葉 椿 松をいじていしてのきりぎりす

紅葉 とつて紅なる 柏 はたてのしきとて

青葉 私とじてい 夏乃葉 あなは

赤乃葉 あか 秋乃葉 あき

山樓 あまのり 津 つ

紫 むらさ 冬乃葉 ふゆ

白乃葉 しろ 草 くさ

野乃葉 の 他乃葉 ほか

力乃葉 ちから 波乃葉 なみ

志賀乃山 しげのやま 那遊 なげう

霞の園 かすみ 清水 しみず

ろくろ ろくろ 鳥 とり

鷗 う 鷗乃葉 うの

鷗 う 鷗乃葉 うの

鷗 う 鷗乃葉 うの

鷗 う 鷗乃葉 うの

鷗 う 鷗乃葉 うの

鷗 う 鷗乃葉 うの

鳴

甲く 乙く 丙く

じきん

報より

くけふ

報よりけけふのちゆるとまのち
曇りけけふの心ありてのちよなる

藤小まじ虫

何かふ

報より

麻乃園

佛の法と鏡まづの麻神園なり
るれも報より

かひさう

猪

狐さふれか
ふたつくひ

報の歎あふゆ

頤乃雷

報より

眉乃霜

白あ

かり火

報よむおひゆわくまふあは
りたけ報より

小乃風

あめ
報より

さうか

いざゆと報より
り大綱報より

五 祓祇

うさう白虫乃新ハのそ
おしとよまふ

天堀戸 八咫鏡

真坂樹

神御山 神山 神宮

鶴乃

羽く

らさく 板枕

火燒屋

太ゆか
あり 庭火

いこ竹

あま乃うし乃類

よねへかお 出たて

小豆衣の類 東越 求子

し女子乃類 早ぬ いま話さ

小へ 御後 以能示うはい物事

韓非 五活く 前帳う外

あ非祇乃初未暇

六 釋教 彼個用伽しよまの類別より不及死

鷲峯 鶴林 我立札

枝山 室乃産 家と出

破小じふ 三車 三世

其曠 一夏ありり そく一夏とつりり

じふ乃重 常灯 衣玉

山伏 二月乃列 六道

胸乃月 心月 檜は心 あつこい乃

おししてはら 經文 要文 あか藩釋教

さりまをり あつこい乃

七 述懐

述懐とは、うらみの詞十二
やまのうらみの詞一代一白述懐の
心をもつものなり成すなり

昔 古 老 生 死 世 親 子

苦 衣 墨 後 神 隱 家 持 力

憂 力 命 おの影やうら十二なりとよ
そ述懐の意なりとよ

病臥せり詞の述懐は不用也也是影式の
詞なり生りの詞は有るも述懐墨後衣神教する人
さうれり一述年一はゆありとよおれり墨
後此佛才子に衣服志乃ち也又甚後抄子すと
との苦衣自影とん程不程影式今葉のあくと
の用とやは今葉也其述懐より神教子あると
ひよる記方命かとうよとやとよ成ゆなり

十二乃外 白 髪 我 齡 心

乃 垂 け 垂 々 おの垂け垂々
おの垂け垂々

鏡 の 影 の うら 心 鏡の影のうら心
まことよとよ

泣 ころ ころ 泣ころころ
とつころころハ述懐ころころとつころハ
此述懐は罪科ハ教教也とよ

八 裏 傷

嚴 乃 苦 塩 下 山 女 の 姿

あはれ ぬ 道 心 あはれぬ道心
おの影

甘 久 の 煙 古 枕 甘久の煙
古枕

右食 意より遊懐より遊懐と云とし
いていゝのうりなりあり終
遊懐のうりいもたつと
の打あし遊懐のうり
あせ念考類ありてハ喜陽あり

九 山類 峯若おし類別あり

山姥 山人 他人ハ山類あり

アト鳥 山梨 なるたふい

山 山類やとらあやあやの白河

伯耆寺 准在山関山類あり

伯耆乃鏡 山類あり宗祇抄あり山類

志乃山 依句もあふるなる志乃山あり

浮嶋 山類あり原ハ

小嶋 葛城乃若橋 計ハ山類あり

あさ海 葛城 山類あり

あさ海 葛城 山類あり

そしつか とつりも

山形より

松本

松人ハ山形

炭之海

炭やき

海

海はとけの字入てハ

海川

海川

雲井山

天竺乃山

雲乃ありて山乃ありて山形也又海氏ハ
中ノありて山乃ありて山形也又海氏ハ
此乃ありて山乃ありて山形也

畑

山形よりけらり

山形

北山類分

山形より山形

雪山

天竺大雪山乃ありて山形也

乳馬山

北山類

雪山

山形

山陵

山の字あり

山島

仙人

山の字

山科

山科乃矣

立田河

立田河

富士河

富士河

宇治乃河嶋

田養乃嶋

三嶋

三嶋

浮嶋乃原

浮嶋

浮嶋

室の八嶋

水き

淡海嶋

河嶋

河嶋

河嶋

りしもの園 於麻路 曰於麻園

ま嘗路 吉那 此か 世方野

小神乃奥 小神 おちいしん

きり海よの山神 三輪りさ記

をーぬの神 おとまり

小伯瀬 おのせ

言ぬの松 瀬津瀬 ちり 瀬津

瀬津川 足橋 造り 札 たて

社人 炭焼 人備 氷室守 日水室

薪 妻木 寺 たて

末の字より 猿 まのぬい おのぬい 山 おのぬい

十 水邊 毎岸おのぬい除く

恒名乃神 あり 蛸 おちい

敵生 神祇より 困物 おちい

法乃あり 三輪 おちい 松 おちい

石 郡の名より おちい おちい おちい

一乃名を以て一切ありゆりゆり

難波津

なるふく
水邊より

清見寺

名取乃目河

浦子河内関

色水

といはれり関門目付関水もみよりの関ありと
とよみ海古小船のき山といひて
まきり

淡

勿論ありゆりゆり淡海崎といひて
もみり色ゆりもゆり

回叢嶋三嶋

標列乃三嶋乃まや

由乃嶋

志賀一松

まとい

もみりきり志賀水也いりゆりゆり
まといゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まといゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

松嶋

小嶋ホ

水室

柳坂

ありまや

ゆりゆり

泊

舟ありまや
おといゆり

波乃紀

まといゆり

河ら

回井

子波乃水

ありゆり

かき

まき馬

冬や

水雞

千鳥

ありゆり
ほりゆり

行の葛蒲

あやめハ折子あやめを
ゆりゆりゆりゆり

と由出

ありゆり

かたゆり

薦か

新そよがりあり草のありゆり
ゆりゆりゆりゆり

丹波の庭も海も海る海 まいたりし

月乃てし いよこし 地味 いよこし いよこし

北水邊 みきふ いよこし

難波 いよこし いよこし いよこし いよこし

多ふ いよこし いよこし いよこし

恒吉 いよこし いよこし いよこし

横川 いよこし いよこし いよこし

あ いよこし いよこし いよこし

松浦 いよこし いよこし いよこし

白河 いよこし いよこし いよこし

言 いよこし いよこし いよこし

三 いよこし いよこし いよこし

夢 いよこし いよこし いよこし

岩 いよこし いよこし いよこし

二 いよこし いよこし いよこし

行 いよこし いよこし いよこし

いよこし

いよこし

いよこし

いよこし

いよこし

いよこし

いよこし

いよこし

いよこし

いよこし

いよこし

いよこし

いよこし

いよこし

いよこし

いよこし

又 いさくけいめい
く いさくけいめい
く いさくけいめい
く いさくけいめい

月乃收 後君おまの 小田返

苗代 子集 小田乃材 まよりりて

山類 いさくけいめい

神越くあ 祠の海 磯あ

布河くは 網 菅

鶴 鷹 鷗 鴨 いさくけいめい

不馬 いさくけいめい 日吉現 いさくけいめい

剛衛子 いさくけいめい

う いさくけいめい

う いさくけいめい

十一 体用之事

山類体之分

峯 いさくけいめい 嶽 思 洞

尾上 岨 麓 坂 谷 鴻

この外山より
図の中あたりに
おまの山は体用
の体あり

富七 浅洞 葛城

用之分

澗 杉木 材 炭 竈

水邊体之分

海 浦 江 磯 堤 渚 嶋

奥 磯 干 泻 岩 汀 沼

河 池 泉 例 例 例

そのまのせとつりてと目か

用之分

波 舟 水 塩 水 室 淡

多 淡 舟 雨 伽 結 清 舟 舟

おまのせとつりてと目か

体用之外

浮 木 舟 流 塩 産

垣燒まの丸 蛙かま 杖か 葛蒲かき

葦あし 蓮れん 真薦まゐし 海松うみまつ 和布わふ

藤垣草ふじがき 萍へし 海人うみびと 奥網おくあみ

釣つり 釜かま 下樋しもひ 筏いかだ 千鳥ちどり

舟馬乃類ふねうまのるい 水と云字うわも用りあり

居而体之分

軒のき 庫里くらり 窓まど 門かど 戸かど
樞すゑ 蔓つる 壁かべ 隣となり 垣かき いと体也

用之分

庭にわ 外面そと 簾すだれ 関屋等の居而も二も

又 乃扱ひきりて居而も二も いづく室乃戸矣居寺家と出里非茶所
階かゝ 階ホいと居而も二も

雜物体用之事

假令表といふありと付へ又引入る事と付へ
付へりしに之れ用りありと付へりしと未と付へ
是体ありと付へりしと付へりしと未と付へ
〜の長といふあり 繩と付へ又類と付へ
〜の紳ありと付へりしと付へりしと未と付へ
これ用りしと付へりしと付へりしと未と付へ
既細りたりしと付へりしと付へりしと未と付へ

長短三身用多り或同をさしお連らりといひ
又いらく抄の生類未だ此外に於て二句つて
なりをさし新用の所はありむハ三身三句是
とゆくと一三句つて今んまの神用多り無令
波とて浦と付く又あるといはく一三句用乃
中一り神へさしお連らりなり水鳥舟さし
事との体用乃おまらりゆりて付く一三句各別
おまらり又体の中へ用をいれとあるハ体用
用体くあるハ体用用と体とゆくとさし

十二 可隔三句物

月日星 あはれ天象の君 雨 露 霜

雪 霰 くればとてのあり也 霰 霧 電

煙 あかき 又 よ草 雲 よ 鳥

鳥 よ 獸 よ 名 よ 名 よ 又 よ

と四乃名ハ二句あり 七夕 よ 月日 り乃名より

十三 可隔五句物

同字 日と日 風と風 電と電

煙と煙 煙のあは七句あり 時と時 山と山

浦と浦 波と波 ありあり

道と道 夜と夜 又と又

草ノ字 鳥ノ字 獸ノ字

虫ノ字 虫ノ字 虫ノ字 虫ノ字

鳥ノ字 鳥ノ字 鳥ノ字 鳥ノ字

連ノ字 連ノ字 神ノ字 神ノ字

釋ノ教 釋ノ教 神ノ神 衣裳ノ

衣ノ裳 山ノ字 山ノ字 浦ノ字

浦ノ字 原ノ字 原ノ字 原ノ字

魚ノ字 魚ノ字 魚ノ字 魚ノ字

十四可隔七句物

同季 月ノ字 月ノ字 松ノ字 松ノ字

田ノ字 田ノ字 衣ノ字 衣ノ字

海ノ字 同 船ノ字 船ノ字

舟ノ字 舟ノ字 舟ノ字 舟ノ字

衣ノ字 衣ノ字 衣ノ字 衣ノ字

松ノ字 松ノ字 松ノ字 松ノ字

田ノ字 田ノ字 田ノ字 田ノ字

亦字

小竹田并の亦の三味舟
思衣河亦之胡ろ無み

花

白と皆七
白去如

十五 西の勺

同十勺と凡可嫌
毒

發勺

いっ勺乃内外の書籍中統を以て
も工支作意をめぐりて其

眼勺

勺は名無法又おもいとしりふるさうい又
名亦在りも亦一す雪月花未の時節も

心勺

心勺發勺よりきあがりてうまきしりらん
るよの神脇勺は不似合申山よのやうらう文字

骨三

よりハ右より中挽め記さるる骨三
を脇乃心とさるる一作はく肉

付

付きよりとよみれんるやう文字を以てと
らるるも有りたれ書通ふてと有り

四勺

よりハ右のまき方乃凡さすよ々嫌也
ともり十勺はらりありは腰の勺ハ

都右

不苦也愛といふ字も腰をくく不苦
世乃字紫は戸きくく

世乃字

紫は戸きくく
懐く海

郭

郭は戸きくく
懐く海

孝

孝は戸きくく
懐く海

浅

浅は戸きくく
懐く海

森

森は戸きくく
懐く海

界

界は戸きくく
懐く海

二向をハカシテ多記するなり
可きものもや從亭の心よりいふべし

雨乃白勺め

毎とてあはれん
其の地部より
無脱なり

十六 梅廻之事

薰

とくふりりこころ
寸毎少く
と付牛

と心ハたさめと
と心ハたさめと
と心ハたさめと

煙

とくふりり
とくふりり
とくふりり

夕立

とくふりり
とくふりり
とくふりり

雷

とくふりり
とくふりり
とくふりり

同地地

夢

とくふりり
とくふりり
とくふりり

いりり
いりり
いりり

わいりり
わいりり
わいりり

ふりり
ふりり
ふりり

遠隔廻之事

及地部とハ白く
及地部とハ白く

りりり
りりり
りりり

花乃白勺
花乃白勺
花乃白勺

風 夢

又、いづれも梅梅枝のむらあつらふらむのわらわらと隔
てもるをせし耳にふたつにわらわらとてはくし
平みと遠梅廻るりそ外雲月むもよ風雲
勢未と心より白作るくも遠梅廻るる人のけい
けいん歎

十七 操洞之事

春之分

去船 春河 花乃川つゝ

梅木 庭梅 うと梅 花小鬘馬

とさめあしし小のうきとてたむ雲とさし細り
るうりて少とあかきこのあり

梅乃雪 紅梅 小柳

玉の小柳 とさめあししはこれつゝさうり

花梅 梅乃ありに 白梅

梅乃あがり 花乃月 あつらふら

花乃あがり 友鬘 花乃あがり

あしつらあしつら

夏之分

夏ありり 一交つらふら

夏草

喜ぶまを 喜ぶ楓 喜ぶ梅

梅乃ぬ しーのむかひの好とありて世に用ひて

雲乃孝 あまのつらさなり

火乃燦 あまのつらさなり

蟬 あまのつらさなり

初時鳥 あまのつらさなり

糸乃ひり あまのつらさなり

入田 あまのつらさなり

短歌分

短歌 秋乃ぬ 秋乃風

菊 あまのつらさなり

屋 あまのつらさなり

あさ月 中月 田下月

遠田 あまのつらさなり

勢乃 麻乃 書色 熟乃

うす衣 あまのつらさなり 空紅葉

山崎心 うき情 二乃くふ
也一又 便又 浅契

かいらきり ちす契 ちかひた
とよ若 あもろぬか ちかひた
橋本 ひきら帯 ちかひた

猿之分

猿口河内 遠猿 猿とる
乃つれ 老道 門とる

て舩 いろはのあしとるなり

山類之分

山寺 ちい山ちハう山 山尻

山雲 深山 山とる

谷里 夕山 吾神乃林

あいつわの嫌なりなり神のあつくりなりとる
うけつれいけくまりとる
乃かつれハきらなり

水邊之分

久著 水乃きこいりし下ありきたてきこ

水回 みくら塩 塩く

おら 志不 塩あり 塩所

う 志不 風 船 船

あ お け 己 舟 換舟 夕舟

船 より とも わ ね 船 の 船 長 ぬ 通 せ

遠浦 浦 人 は ち の 人 を 見 し ぬ

海 あり 新 田 川 風 は 潮 の 風 が 吹 く

伏見河 入 江 田 漸 音 ぬ り 入 て

池 邊 波 あり 舟 は 舟 の 地 方 小

わ ら 乃 の 志 を 見 り き く と つ 乃 を 見 し

報之介

都 あり 東 風 信 風 東 あり

来 衣 東 あり 舟 は 舟 の 地 方 小

う お 終 り 市 馬 舟 は 舟 の 地 方 小

鴨鳥

鴨鳥のしり馬

祢より

ふいり

まねきしり馬

神風

地を吹

聖里草の菴

座敷

里田

えるの庵

遠里

ま里少神ありしり
名をわくしり

人里 やせりり里

釣文

申ふ文

胡燧

押的

まはり天乃

まはり

控人

まはり人

音人

人志

子と控て

まはり子

友とら

賤乃め

年たあ

そこかた

か編り洞るわ
ありり

老らく

従老らく古人まは
る新るはり

ひか人

まこ衣

うますこ
衣はり

田乃あ

た乃あ

聖田

りりあひり

あひり

鏡乃祢

か鏡乃祢のまはり
まはり

雪乃え

神のま

まはりまはり
まはり

はまら

紫乃り

あひり

あひり
あひり

舟乃折り記

あけりしと多記河海乃とま
う通用候のしあり

幸哉 夕電 通

舟より 三々 竹乃指

きつぬ火 うい電 あまのこも

時—あれし時—あれし

こも— こもたせえをといり

はとめ乃折 はとめあまといふたをこも
つとけしとていり—万

ふれぬの ふれぬの はとめあまといふたをこも
つとけしとていり—万

又上乃句は嫌物事

たうへく 難 こきま し 孫

あて こも おま あ 坊 あ

さこ こ たま あ はとめあまといふたをこも
つとけしとていり—万

乃 あ け あ はとめあまといふたをこも
つとけしとていり—万

り あ 乃 あ はとめあまといふたをこも
つとけしとていり—万

ま あ はとめあまといふたをこも
つとけしとていり—万

い あ はとめあまといふたをこも
つとけしとていり—万

五月ぬり

鳴鹿る 鳴な 鹿か 鳴な 鹿か 鳴な 鹿か 鳴な 鹿か 鳴な 鹿か 鳴な 鹿か

いところのふりまのりすすありふれ類お
りいっつりふりまのりすすありふれ類お
えより

と乃句れ つかりありつり
しつーきあありきく品あつてさあり

下れ句乃ありよ嫌類のり

ふろふ 乃乃へ 入ねまめ

ありは へ へ へ ねまめ

一 聖が不始つけつり

い下乃句れありよ嫌類のり
下れ句乃ありよ嫌類のり
たれしとれも下よは使用たふさつり
わり知とるなりすもくまありのなり嫌類と
いも古人の発句りありきく一しりり
りハ発句りハなり ありきく一しりり
り名通乃ねわたりありきく一しりり
守乃せいの詞 ともむきとハあひつり
ともこけらありきく一しりり
ま細やそ今んをわりきく一しりり

十八 可思惟奉

儒道釋教道 そふぞんたつたあやめり
りや文學の宮よ字書を

つゝあひのせしも戸さしえあやましくし 塵世自
然乃道理とありともしも世をけわてこ心をま
くあり体あつらん一筋をとりま乃實をいふ
罪者と入も法乃及ふ入るに心をけさ風を
けふ人塵をけく塵戸とさこいあけはりよく
たりしきわんゆよくかきまあけてさり
くくさり乃あひのけさくさるるまのまけり
これ才一の思惟なり

發句

ハツメハ乃山海地景四季草木花鳥
為葉風電露霧白多雲雷温熱
冷寒月乃上弦下弦の時節ふたりの長け
秋乃りし苗意即妙乃風体也思あつるあり
秋乃りし苗意即妙乃風体也思あつるあり
乃まをさるの發句又千句乃發句ハ教日工夫思
りくくさり種あつる苗一苗一命人小ハこころ
金くし

一頓乃句

まといふれん既四しへ東せあわ
たさあつたあ乃句さるるあり
とまへ一帯まへん乃約ありまへハ世奥千
あつる再あもあ

花のあ句

まのそとあつた山さるる又雪
あつた白のまやそれあけあつた
てあつた一帯まへん乃約ありまへハ世奥千
あつる再あもあ

鳥のあ句

ハツメハ乃山海地景四季草木花鳥
為葉風電露霧白多雲雷温熱
冷寒月乃上弦下弦の時節ふたりの長け
秋乃りし苗意即妙乃風体也思あつるあり
秋乃りし苗意即妙乃風体也思あつるあり
乃まをさるの發句又千句乃發句ハ教日工夫思
りくくさり種あつる苗一苗一命人小ハこころ
金くし

初鴈

初鴈あつくる記はるる種をいふ

鳥

まよの白の深山遠谷のこころのけしき
わきまのけしきくまのけしき
物と物といふかたちとちさく
むらと雪ふゆのけしき
すくすく
おのけしき
まよのけしき
むらと雪ふゆのけしき
すくすく
おのけしき
まよのけしき

海七摺

まよのけしき
わきまのけしき
物と物といふかたちとちさく
むらと雪ふゆのけしき
すくすく
おのけしき
まよのけしき
むらと雪ふゆのけしき
すくすく
おのけしき
まよのけしき

春夏

まよのけしき
わきまのけしき
物と物といふかたちとちさく
むらと雪ふゆのけしき
すくすく
おのけしき
まよのけしき
むらと雪ふゆのけしき
すくすく
おのけしき
まよのけしき

水書

まよのけしき
わきまのけしき
物と物といふかたちとちさく
むらと雪ふゆのけしき
すくすく
おのけしき
まよのけしき
むらと雪ふゆのけしき
すくすく
おのけしき
まよのけしき

哀傷乃句

まよのけしき
わきまのけしき
物と物といふかたちとちさく
むらと雪ふゆのけしき
すくすく
おのけしき
まよのけしき
むらと雪ふゆのけしき
すくすく
おのけしき
まよのけしき

老後乃句

まよのけしき
わきまのけしき
物と物といふかたちとちさく
むらと雪ふゆのけしき
すくすく
おのけしき
まよのけしき
むらと雪ふゆのけしき
すくすく
おのけしき
まよのけしき

海節

まよのけしき
わきまのけしき
物と物といふかたちとちさく
むらと雪ふゆのけしき
すくすく
おのけしき
まよのけしき
むらと雪ふゆのけしき
すくすく
おのけしき
まよのけしき

先須美乃露がけはたまひきまらりかこ山里の
垣下の梅の咲りぬそりも雪戸のあふとどりめゆ
うらひよの音乃まろなりしく時らりまやうりの
まろの歌の尾まろて管も申とわしまあ草村唐
乃物まのりまろけのぬり山部去れ一節と
まらまひてまけまろのまおまろまろまろ
涼しさをゆわくあまさをまらあて下駄のまろ
よま記まろりまろりまろ申へまろ記月時
まろけ千輪のむもろらひまろ紅葉まろ枝
りまろるまろ時申一のまろ霜とろりまろね
乃水の音もゆりまろひまろあまのまの風の
際りまろたまろまろけてまろ外山のまろ雪ま
言申一年まろまろらまろまろまろまろまろ
まろまろ心のまろまろ光源矣申まろまろまろ
ぬまろまろまろまろまろまろまろまろまろ

まろあり記まろまろまろまろまろまろまろまろ
乃り記日まろ申まろまろまろまろまろまろまろ
毎路の乃りたまろまろまろまろ山の下道まけ
まろ一秋原乃まの草枕まろまろまろまろまろ
あまれぬ心まろまろまろまろまろまろまろ
まろまろまろまろまろまろまろまろまろまろ
まろまろまろまろまろまろまろまろまろまろ
まろまろまろまろまろまろまろまろまろまろ
まろまろまろまろまろまろまろまろまろまろ
まろまろまろまろまろまろまろまろまろまろ
まろまろまろまろまろまろまろまろまろまろ
まろまろまろまろまろまろまろまろまろまろ
まろまろまろまろまろまろまろまろまろまろ
まろまろまろまろまろまろまろまろまろまろ
まろまろまろまろまろまろまろまろまろまろ
まろまろまろまろまろまろまろまろまろまろ

古今集

氏花路

氏花路
まろまろまろまろまろまろまろまろまろ
まろまろまろまろまろまろまろまろまろ
まろまろまろまろまろまろまろまろまろ
まろまろまろまろまろまろまろまろまろ

まはるゝのまゝ一掃ゆりあつたら大ね流るまゝにうゝま
まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

はるるのまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

難波のまゝにうゝま

依那のゆりまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

ふもねのまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

まゝにうゝまゝにうゝまゝにうゝま

はるかに記方しつて後代まで人のあそびま
種よりなりきつねまといひしりたるんからり
一用心とく一

同意之事

假令^{たとへて}字^を記^す風^を なとよ冬ころの峯れ風の
あう記なよの業

う坊も音とあまのまのさむしーこ

とく白りぬきくろくろ山つれ長岡とてなと
付り体毎度りり物るまやきしあ白と二たひ
とるあつらうりまり

花とれをふ なとり橋と敷けとみま
是かひまよ同しまり

花 りしち柳とまあしき柳といまけりまか
たまりぬけ乃さういさうくへぬきりまや

野乃まけり なとり夏草とたり記体
みか同あまり

霜 りあつれこりりなとりあすりみか同
あまり

葉 ま枯生の柳と付事一石溜みか比具
らり

増 とよ白りりりり力と持人りり衣
とさよとあんなよの体同事まり

心みーかく約俺 なとり交れぬい
らり

ま はらのあーたなと付らま
らり

あ と云ふよ社の子らとまらり一と付事共
同事とくらまねとまらりあや時更志の白

り同意 い何り付てと一けり
あまり連歌いまり

ねるへらりそそのりも無り葉とら物さしサ紙
とふく同し心とれいひつまをわくありうけを
こそ物じんあまり

十九 数句切字之事

哉 ぬ たり せ や ち

志 一 き ぬ け の ろ

い け ち ね い せ い せ きみのこ
いけね

きり あり くれ けり いけり

又下知 たる 又字 未 みな切字あり

花のさるが 風さぬ 白ひり

葛の葉や 向人るわ づりそ

山遠し まきの藪やるまの志りーい切
是はひらふーあり

うらこし まのりきり 秋のめ

ふのぬはる物是は
とらんあや 後清 梅のく

寺なるやいひ 雪のれ 秋のそ

月を 言あがり 志のそ

花いさ ことあま 山さり

空の山

是より下知

月うまけ おめ

あふ 明日とて 見せ

おれへ らる 珍 宝

ふりあふん あけちりらんありの露のまわ

ふりあふん あけちりらんありの露のまわ

又面よんしめ切字

五月の山 峯 松 坊 音 乃 妙

花いしも柳 いろいろと

これ二句乃侍しりくさむとやみ細ちくとさ
まいたる人ハ向もいへも書蓋よりむりさうさ
葛の葉やまといりりり物つり一句つはさ
さあよ五り七又まをまてと書あつし
西給計マをの一字二字まで切字乃み甲ハ
とよも書言抄乃名よりりり別よいしつ
る記とあつとと書ゆり

二十 句数之事

春短恋

いとめ句はくさし長秋の句ハ
この句よりめ句りいさへ一
句ハ二句よりめ句いさへし
一句ハ三句よりめ句いさへし

夏冬を祿神祇釋教の二句ありて

三句ありて

連懐く旧を常在け内とハ連懐く舊

句ありて三句ありて

常懐向未何ハ常利あり連懐ハ

山類水邊居ハ上種用乃美利

あり夏冬と

人倫二句ハ不答三句ハつて

植物二句つて

乃三吟

乃三吟

乃三吟

乃三吟

生類二句ありて

女一本弁取振之事

弁字乃

月

山

山

山

山

いかゞ川了すあひこりれ了らふのみこのあなよ
 たり之文人のとらりいあきえ後部をてふふ
 こりけりし川をけりしはれを山
 中を續後撰集下てその因や古と集より十代や
 今集と河より又近代の人乃がうそそ中乃の用
 へり近代乃集作者たより證言小の用十し極河
 院も所百首作者下つたよの雖入近代集可為
 本乃例他人のあし紙く不知たよの付合よよあ的好
 用や依事可川用抄やとらえと集の初より
 本乃の例といふれ中乃の用乃例のことと集の初よ
 とも用よともり又後氏抄の初の初よの初よ
 三白と一他印一白二白つたりとらえたりと
 三白は後普光園乃流より罪をい流とらえ今
 集と初や他二条河家門乃流より人流て河河
 中ととらえ三白用らり近代の千白おあひのり
 の是宗領乃流よりたとい自我齋村述作宗領
 乃流よりとらえ近代の河河河もつてを二
 白とらえ一とらえ二とらえ三とらえとらえ
 たりとらえは是とらえたりとらえたりとらえ
 たりとらえは是とらえたりとらえたりとらえ
 たりとらえは是とらえたりとらえたりとらえ
 又いも初とらえとらえとらえとらえとらえ
 たりとらえとらえとらえとらえとらえとらえ
 とらえとらえとらえとらえとらえとらえとらえ
 たりとらえとらえとらえとらえとらえとらえとらえ
 たりとらえとらえとらえとらえとらえとらえとらえ
 たりとらえとらえとらえとらえとらえとらえとらえ

廿二 初下之事

先末よりして貴人宗通孫容ヤ事ふよの記
 乃初を見けくうひさつと一礼してやそとて又
 甚よとらえとらえとらえとらえとらえとらえ
 他貴人ヤ人さあめとらえとらえとらえとらえとらえ
 人さあめとらえとらえとらえとらえとらえとらえ
 あつとらえとらえとらえとらえとらえとらえとらえ

すゝといふより筆を足らざるひてとめて垂二り
折てあり懐紙といふ付く中ニ投て又ニは折て
之め硯乃のさよ入てなるまのまきい又なるよま
よといつたやうなるさむりよりあつた
し又臺の下りもさうありて世で記す
るといふさういふよりあつた
懐紙と入とも硯のさよ入付てさう
と下捨るつと一たる懐紙のさよ
なりといふ中ニ投より記すに
より四書とよ中して書へし
ともいふ當季れ伝乃あり書り
より懐紙と折て賦といふ字と書て
りりて約也發句結んでる
るさうりあつたり賦句を定り
るさうりあつたり發句と書り
人のいふさよとよ録と名早
ひ一經文と連歌名号と連歌
歌乃文とよい要文の連歌と書
書遊音亦さうりといふ
乃よりつたりなりといふ
て懐紙よとよ又臺乃とより
そ其一順と墨さうり懐紙と
向一懐紙と折て又臺よと
また折てあつたやういふ
又また折てあつたやういふ
夢想之とよとよい今ハ御
字書へしとよ今ハ御の字か
て脇のさよとよとよい
るさよとよとよい脇のさ
のさよとよとよい脇のさ
いといふは合してさうり
らといふは合してさうり
らといふは合してさうり
らといふは合してさうり
らといふは合してさうり
らといふは合してさうり

字は惣利曼入といふ字を以て初形の意ききしむるも
ありゆゑのついでに昔の意ききしむるも用捨ありり
字にまじりて心よきしむるも又近代一字の顯常の
百款は字のついでにと云ふ人ありきりてしむるも
枕書に勿論一たるもやそ席の無きもせしむるも
字のついでに心よきしむるも又近代一字の顯常の
百款は字のついでにと云ふ人ありきりてしむるも
枕書に勿論一たるもやそ席の無きもせしむるも

- 一ハハ前人を敬とてしむるも
- 二ハハ不倫親睦好悪平等の心ありしむるも
- 三ハハ席の年編を以てしむるも
- 四ハハ指合を終入人を以てしむるも
- 五ハハ雪月花のありしむるも
- 六ハハ宗匠老人の異見ありしむるも
- 七ハハ法雨抄のありしむるも

八ハ懐紙面も跡ありしむるも
九ハ五帝三總を以てしむるも
十ハ法度形儀終自を以てしむるも
十一ハ法度形儀終自を以てしむるも
十二ハ法度形儀終自を以てしむるも
十三ハ法度形儀終自を以てしむるも
十四ハ法度形儀終自を以てしむるも
十五ハ法度形儀終自を以てしむるも
十六ハ法度形儀終自を以てしむるも
十七ハ法度形儀終自を以てしむるも
十八ハ法度形儀終自を以てしむるも
十九ハ法度形儀終自を以てしむるも
二十ハ法度形儀終自を以てしむるも

五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

交朋を絶
 自れ佛性
 又いへば
 善人値遇
 必通結也

又いへば 執筆十行徳用と云ふ
 又いへば 善人値遇
 又いへば 必通結也
 又いへば 必通結也

世三 一座法度之事

發句ハ 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

才三

ハ發句脇乃心を精しむま柳の枝を
つらひとほむけい意のうへてさ
二木とも子折りしれはうらやまやしり
ありのすもあわも平人の電用飲

いふおしせ馬

ふふことりふと發句よま
ととより魚刺るうらま
好てけううらまんの電益り

かどけ神

まともあじん句の軟教非祇
あまふ句嬌まり

釋教

と西懐とじまひさう句軟教の句
あまふ句嬌まり

西懐く旧女常

け三川合て三句ま
一といたとく西懐を
うり三所けくまへつはと云候や西懐を二句
しと電たの句一とまわく合て三句とひふ
うらま

西懐く旧女常 兼傷

お乃乃何
五句嬌や大

ゆこり同あまらゆら

西懐

り電た付て又西懐の句く
懐向て甲しちんまらるる用終り

憲と

一し地作くよら記くまはるや
と打あし西懐もすれまあ人の
らあをとり電さつてゆりまら
こくへい候よあし何かり

四季の句

まも西懐乃洞入
まりりしと西懐非祇
あまふ句嬌まり

平姓

乃白ま意の林乃白
あまふ句嬌まり

雪月報

白作雪を
あまふ句嬌まり

世の家乃所心風雅乃命魂よりそ一々の貴人
字人少童とふきと見えしはこれつづしよりき
されん後六年人ときて一徳自就名句を世
果たし人ハ不可及斟酌雷雨むの乳汲けたの
境あり

文字あり

新式ハ及打敷あり斟酌
とあり一語よりつづきを
あり後句一有用の字をわけるいより互の致と
いふより名句ありあふめく月ハ明の
るといひよりふささやうめいのみつひあやよ
二三とく流しと寸ちかく紙云の句あり
里ハわかくてこれいハぬのこりたおとあり二字
ありなりとも耳よりと堪能の二人ありまきや
とけよりしゆん人のゆきまへよりよりしり

裏付一順

西乃一順再々ありとく又あり
ともやくとや

あやう

長帖ともよ一うまでいあげと二句
ありともつとくやし象傷ありなり
向ふ方へつとけりと教言ありさきよりありとつ
りんの従女んをいいたといあげ句ありためて
たき白ふと不似合ありしり一不似合といとあ
わりめてたつとせと不出入句ありなり

女曰 乞席作法事

其席より中よりゆめく御命なりまへつすあの
夕よりあつとをさひのせ終兼古事由流おの親と思ひ
つ了縁内外乃書籍和漢乃古事と心よきとひ
杖見しとまして早目より衣裳をむいつくあり
出席者へしとまへいあつともそのかより義聚あり
と不似合とのけより早草ありとことし

くはつた人の目りたあまよりうたせ
終日の形儀おぼくれとてわて古人の去と
思ひ中と都白禁白おとあやまたり色ひ
しととり言報後言吟おた中一このうく隣
庭の罪儀より貴人呪ましく白声をいり吟と
いちまけ産後とて言くまする白とこのたうり
出く人の身よりうたていれとていれ又いれ
よひうたてつらひあより乃人よてとあまはひら
るし産後とてあまよりてさうりこの用持ま
しと狼藉玉扱まりけ及の思いと花馬の
る香ふとて心と千里れ外よめくつてとて
まの精とてつめ言りよと思ひるやも人の目り
から取よさらうらうらうく動いんちやま
人の白と女と時あうらうらうら地よりとて
ありしあうらうらうらうらうらうらうら
まのあより一物ありあよりよとよれあまの
守りまきゆりあより初心とて母下子付は
あつしとて初とて約とてころと金言とまきと
まひとていんはつりあよりまきとて
去席といれくつて諸礼とあより懸懸るひ
さうりともりゆとて二産よとていれ千句ま
ハ礼儀あまくとてとて一物筆とあより指合と
うらうらうら一物の宗通ま人まとい言別のも
自然とあより初筆とあより情ありいとて
とてとりとも者中とてあより人の白とて
さうり白たとい秀逸おまたりとてあつて
神句り人の付さる人君の産後とてあつて
とてこれと吟とていれとてあつて
とてあつて雲月とてあつて又いれとてあつて
とてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

いふが、いさうの同特賦在終まると。毎度よけふふ
 休も初ん付まういせりまうとて條ゆり去
 ちる字遣とひいさう條へさ小あれ和方乃
 行りマいささる初とひいせり。てをちりう
 行りたれより文はさうさる。の一枝軍も出
 らあはん時、在事おとせ。く出れ、花實とま
 傳り具あるあり。又け。とさる。一、寫時鳥
 むあ。まうさる。あも。毎度よけふふ。例のえ、あ
 よむ。といえ。れて、いあ。う。さ。ゆ。り。何。り。付。く。と。心
 乃あ。く。り。な。く。た。う。さ。ゆ。り。い。あ。う。世。を。け。く。う。か
 り。い。さ。う。人。さ。る。あ。り。も。到。ん。可。給。連。う。も。さ。う。は
 ぶ。り。り。あ。り。も。年。さ。も。や。あ。り。た。る。だ。ん。人。の。罪
 う。を。よ。け。り。う。と。心。り。り。付。さ。い。り。さ。い。時。の。さ。い
 志。い。の。さ。り。う。と。つ。け。又。さ。い。り。ゆ。さ。あ。り。あ。い。た。い
 せ。う。つ。は。も。ち。り。付。も。つ。さ。り。雷。月。の。

おう。あ。う。ろ。え。又。一。う。一。具。あ。の。さ。り。何。も。と。上。い。れ。は
 を。約。あ。も。せ。付。や。と。記。し。は。あ。軍。々。人。さ。い。し。付。ま。り
 口。う。し。と。一。あ。れ。仁。と。た。て。儀。を。お。り。く。さ。り。あ。や
 た。く。ふ。く。よ。う。た。ら。急。然。正。法。を。ま。と。ま。さ。し。た。や

廿五 和漢篇

大概念、法、可、因、連、致、式、同、事

和漢、凡、以、五、句、為、限、他、五、漢、對、句、不、及、六、句、也

景、也、草、木、亦、負、數、和、漢、可、通、用、事、他、函、氣、以、下、略

と、和漢、各、の、用、く、と、ま、ぬ、も、頂、面、と、あ、つ、い、い、氣、と

音、も、氣、山、を、く、つ、い、て、二、乃、外、う、さ、く、也、例、ま、り

一、り、も、い、さ、る、用、換、多、く、

勢、也、異、名、就、本、体、可、定、其、書、他、可、為、申、辨、す、と、新

式、同、乃、和、漢、篇、ま、い、り、ん、ハ、異、名、も、り、行、換、の、字、也

と、も、本、体、を、り、つ、く、その、書、を、定、よ、と、り、か、う、も、也、本、体

乃、外、ハ、百、韻、も、一、乃、也、な、り、ま、も、も、本、体、の、外、ま、り

用と只心より能令金鳥ハ日天象なりハ可嫌也
ハ不ウ嫌也但二句嫌ヘテトヨリ可依句体

銀竹ハ白生植アリ石標從竹ハ字ハ六句

金衣ハ鶯是ハ衣リ混乱一ナリ古事ナリ
亦ハ衣類ト二句嫌ハ

為衣ハ蕙此ハ一切リ衣類ト云フハ

霜蹄ハ馬霜ト只字ト云フ不ウ為蹄也
冬チウヘテ以テ可依句體

鯨ハ鱗勿論生類ト云フハ

一座一勾物

新鬼ト類ト連致之新式月分ハ不ウ哉

洞扉玉章免狐此乃美也皆以
一勾ナリ

二句物折ト替

去風ホクモ新式月分ハ不ウ哉

紫紫ト柳柳替折一用ク紫ノ紫ハ各別
ト云フ也

坂音嶋海江堤清

磯沼ワナ

三句物可替折

紅葉又ハ類新式月分ハ

宮

皇居より一非祇子一又皇居神祇乃外子
名およ二とあつたよと名おのうら子一ひと三や

日句物

可替新

和雪玉

いつねとせ方のと

五句物

一二西とくふるま

世梅

春部

新正

歳乃首月也

淑氣

春の気候なり

管律

黄帝作律とき

貞菜

春なり

紫

柳乃るや

暖芳

春の心あり

踏草

春草を

芳草

春草なるや

焼痕

秋の焼原なるや

鷓鴣

春なり

山梁

木の影なり

蜂

春の蜂なり

夏部

新緑

新樹甲

清和

日月のなり

霜

春の霜なり

黄梅

梅のなり

黄面

黄梅時節の

白面

木の影

麦秋

おろいあしき
まきとさり

電

交電の
さり

薰風

いつさのうらさり

短部

初涼

秋涼のさり

残暑

初秋の初也

金氣

秋の金のさり

爽

秋のさるさり

懸鶉

衣のさり

奔扇

あつさるさり

荔枝

秋のさり

黄柳

秋の柳さり

孟嘉落帽

九月のさり

冬部

凍柳

冬柳のさり

凍蝶

冬のさり

枯

草又の心や生
枯よの蝶二句

探梅

早梅のさり

丟信

丟信のさり

ち歳

爆弁

爆弁のさり

儼名

初冬のさり

山類

雪山

天竺の雪山ハルハ山類
ハハ山類ハハ山類

岫

山類

炭竈

山類のさり

水邊

湖鏡

只湖のまや湾 水曲り

一糸

みゆり 釣 田あや

筆海

此も 邊

硯池

田あは 釣らり

釋教

禪

冬禪

定

乞 錫

錫杖

經

僧

祖師乃名

由懷

名利

名を思利を 重なり

蒼

世のまや

浮祿

衰歎

白頭

老

物名

隱

遊

退

疎業

憲部

御字侍

私鏡

因怨

御海鏡

曉粧

黛

義人

別字

此是ハ

望と云や

鴛鴦衾

右衾

右枕

粧鏡

田子糸云ありあはしはとひ少鏡のつわと
まかりなる人きく

昭陽人 しやうやう
楊貴妃 やうきひ
いふはあまのこゝろをいふ
いふはあまのこゝろをいふ

藤部

信 きん
きん信のあ
客 きやく
物實あり客實あり

遠心 とん
心夢 しんむ
一葉力 いつえつりき
漂泊 ひょうはく

征人 しやうじん
友山 ゆうざん
海字 かいじ
可依句

人倫

云侯伯子男 うんこうはくしお
以上是みふの
諸侯あり

士女 しにょ
以上人倫あり人の名も人倫あり

帝王 ていおう
龍神 りゆうじん
松籟 しょうさい
弁友 べんゆう

姓 せい
以上人倫あり

文体

顔 げん
癸 みづ
以上乃類人倫あり

生殖

梅曆 ばいれき
梅暑 ばいしよ
葉白 えはく
杏酒 きうしゆ

草花酒 そうはなしゆ
枇杷酒 びわしゆ
枇杷波 びわなみ
以上

鶴杖 拾枯 伐木 藤杖

枇杷馬 枇杷草 枇杷粥

薊菜 嚼瓜 菜 合蘭 燒香

ひとせ殖りあふ

北和分類

被 暗香 春如夢 胡蝶夢

付勺可燥物

玉章 玉洞 偽真 攻別

ホの類 如とろ 与と葉 似と於

是と新 ありと恋 青と緑 蒼と

白と葉 地味く

蝶打鐵物 分 ハ連致ふある

進ま 及字 顔 及字 あけ之類也

二勺可隔物

月と日日と星 あけ天象ありて三勺隔也
みか二勺あり

朝夕 曙と朝 あけ替りあり時分

雨と疾

霜と雪

あけほの

鳥と獸

虫と馬

あけほ

木と草

あけほ

竹と茅

あけほ

人倫と

あけほ

遠よ近

あけほ

三句可隔均

山顔山類

山と峯

あけほ

山と山

山と道

あけほ

水と水

水と木

あけほ

獸と獸

あけほ

衣類と

あけほ

同時分と同時分

國名と國名

名所と名所

五句可隔均

同字

非祇

釋教

玉懷 志

猿

月

松

舟

あけほ

七句可隔均

同季

あけほ

句教之書

春連字の 夏冬 日 忌 日 忌 神

祇 釋教 猿 車 懷 山 類

水邊 居下 車分 生殖主 生類

階物 倭身物 人倫 衣類衣類

國名 名前 人名り此之類二句續也

十句之内禁制之物 如連歌

不祥字

人名

未の

一 所よ一白のわハ和漢ともり出の身たる也

二 白のわハ一宛する也

和漢二本宛するハ一白宛の景也と云ふも可なり

和漢ハ漢の方より韻字多し一漢和ハ

百韻多し漢ハ十白和五十白なる也

和漢ハ漢ハ十白和五十白なる也

和漢ハ漢ハ十白和五十白なる也

和漢ハ漢ハ十白和五十白なる也

和漢ハ漢ハ十白和五十白なる也

和漢ハ漢ハ十白和五十白なる也

和漢ハ漢ハ十白和五十白なる也

和漢ハ漢ハ十白和五十白なる也

和漢ハ漢ハ十白和五十白なる也

和漢ハ漢ハ十白和五十白なる也

和漢ハ漢ハ十白和五十白なる也

和漢ハ漢ハ十白和五十白なる也

和漢ハ漢ハ十白和五十白なる也

和漢ハ漢ハ十白和五十白なる也

和漢ハ漢ハ十白和五十白なる也

け上下巻去天二十七年一
と皆ありしよし是と記し同十三年
孟冬れり古乃る葉と紙色は眼
乃披見よ入かきやまをれ又と
て再三校合とつけ頗重と章の
里用拵乃詞とくふふ志のあは
風雅ハ本食草衣の意より
さゆよりし十有余年蟲奥の

まことをい其後巴老い書と事
蒙よふくく魚うらう一度くあひ
りよふくく少うり二をい函底
といー其中書と又條以可披
関あり事一教也于時情人竊よ
是こと写ー且流布ととと
祿うくく又祿未史乃舊中を
厚あり慶長改修乃新書以

用小い志うーと一正月上衛よ
清書ー二三子よあふくく
ゆめく地見と向うあつた解門
よ入く其理智と一記中儒道
い赴ていそ徳行とあつた
まま小い忠といー親師よ
者といつた方たといふよ寧ろ
り晝寝祝靴の辯候めい少く時

日とくはんてあさゆきまじむ
乃嘆あめよ箱の葉よ朽て思
髪の色さるう海にまきよ少て海
しつ積乃雪ふもくわくはまら
造ひも頼沛も妄念とま
ぬらうまらわすよりうらさ
引予よ天正元仲冬との五日
小世と出た山よ入探草汲汲り

功一十三年一寺社修造八十一
宇高野山の上早霜廿五天
齡とて小六十二の葉輪よかき
茶くわく人んりよ高祖入定の
曆教よあるわりう紀世乃世一巻
り引きよ一息の終るん夕と約
乃こらり生滅盛衰乃とらり樂
極悲けよあはれ一瞬よいぬあ

らひけし一冊女筒年ふあよ神
垣や梅乃ち枝よ白ひそく免
しうたふこまき方るやとりふ盡夢よ
よりうそそ筆とそじ今又清
書轉軸乃あろつさ霜小入下
葉ハ病のめらこれといつる夢想
あり夢入りあより夢又よあつり何
まよふ浮橋乃あやう記といひり

るぬきうせうるのこまきりつじま
しと難書盡らん時いかりぬき一日
乃に乃こきそ一念のさうひりり
ひとよよ勸善控悪のほよめれと
たろくしに洛陽東山大佛殿奥
院樹下小く慶長二年正月廿八
日書く世間のほつる記とそま
いとむいそり有為乃ぬりあそし

も紀より三巻成行しといふを
ちり無始を終言物に接し
何字諸法中五生の理に接し

南山乞食沙門

此言物と云ふは未代の重宝
なるやし真山上人のあふ海より和
方浦よ心きくつりと大師由ねを
後い御當家よ心とありせ金堂天
塔を此外なくは修造あり東も此
塔に成就をり大佛供養の後を
山少き室よあやうんとあり風雅の
道を弘くするにあり

聖代天皇の御時者、聖徳太子の御
行基堂の御縁と申す、弘法大師の
玉河の御時ありけしと人々の御時
教の御筆達者ありしと云ふ
一合と記しと云ふと云ふ
御時と云ふと云ふやけし、民の御
草木の御時と云ふ断しと云ふ
しと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

じよの御志乃ありしと云ふ縁とし
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
一と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
物名也

慶長三年二月廿日法眼

銀色

此無言抄之作意者兩奧書
在之不意被 穀覽御感不
斜在寫留之任 勅定淺筆
者也

唐長三年

二不親王空性

此無言抄之外題其被深

勅筆 再大覺寺殿 二不親王御

奧書也一覽之以上人依不

中紀之而已

唐長三年秋五月上旬

法眼經也 京新

此一部

禁中へ同へ上

勅後より老筆を海けまへる
あきまへく

天子へ奉進献をまへる

自ら授命し物りむる證正印

飯道寺梅中坊先達行者依高

又此奥書とくまへる

子思ひむるはむる

乃噴筆とまへる

そのまへるはむる

乃まへるはむる

いそへりまへるはむる

言言抄の名りむる

慶長八年正月十日

飯食奥山上人其
判

享言抄卷之下

元和九年 乙巳月中旬

源大郎用板

原

